

☆☆文庫あれこれ☆☆

◆文庫だよりを書いているうちに、突然ザーッと雨。やはりお天気は不安定のようですね、◆あれもやろうこれもやろう、と思いつながら、並行していくつかのことができなくなりました。年のせいにはしたくないのですが、◆Nさんのご援助で何とか、文庫の蔵書管理に手をつけたいのですが、すみません。10月に入ってから、と言いつつ時を過ごしてしまうのが怖い◆モンゴ



ルに行ってきたので、モンゴルの旅の本、あります。日経連載のチンギス・ハンのいろいろを当地で堺屋さんから聴き、騎馬合戦再現を観戦しましたが、今回、モンゴルの壮大さはあまり感じられませんでした。◆馬頭琴を買ってきました。いつかお見せしますね。◆馬乳酒を1日何リットルも飲むらしいですが、コップ1杯で充分でした。◆でも。子どもたちはどこへ行っても元気良く賢そうな目をしていました。◆秋の夜長のおはなし会は、神奈川二ノ宮のお二人と静岡富士の方にお願ひしました。人生たっぷり味わった方々のお話をお楽しみください。◆なお、10月19日からの勉強会は、どなたでもお話聴いて、わたしもやってみようかしらと思われたらどうぞ。何でも少々ははじめはきつと思います。12月のクリスマス会に語っていただきましょうね。◆素敵なニュースです。会員の重田さん母子が雑誌『子どもと読書』9.10月号に載っています。ご覧ください。

♥♥これからの催し物予定♥♥

秋の夜長のおはなし会 (おとなのための)

★10月20日(土) 午後6:30~8:00

おはなしは: 犬とねことうろこ玉・梅津忠兵衛のはなし・妖精の花嫁ポリー・日暮れの海の物語 などなど、お楽しみ!

長いお話の聴ける人ならどなたでも  
(小学低学年はまだ無理かな)

♥10月から、はじめます♥

《楽しんで読み聞かせ・頑張っておはなし》

みんなで勉強会

挑戦したい人、この指とまれ!

★勉強会は、毎月、文庫の前日の金曜日午後★

関心のある方は、お申し出ください。

☆☆今後の開館スケジュール☆☆

◆10月は、20(土)、21(日)の両日です。

◆文庫の時間は土曜日は午後2時~5時、日曜日は午前10時~午後3時

◆毎月開館日の日曜には、子どものための小さなおはなし会があります。

午前10:30~11:00

◆文庫開館日は毎月、第3日曜とその前日の土曜日の2日です(従って第3土曜日でなく第2土曜日ということもあります)。

♥会員更新ご協力、  
ありがとうございます♥

# 沙羅の樹文庫だより

## No. 13

(2007年9月号)



秋雨前線の影響とやらでぐずついたお天気がつづきましたが、今朝は大室山のうへは青空です。

先日の台風はみなさんのところでは影響はありませんでしたか?

文庫のガラスが心配でしたが、何とか無事でした。姫沙羅が守ってくれたのでしょうか。でも昨日来てみると、庭には折れたたくさんの枝が散在していました。

8月の下旬、モンゴルへ行ってきました。今年は雨が少なくどこまでも広い緑の草原はもっと奥へ行かないと駄目でしたが、馬に乗ったりリゲル(遊牧民の住居)に泊まったりして東の間の夏休みを楽しみました。

秋です。コスモスの季節です!

読書の季節がはじまります!

## 紹介 子どもの本 おとなの本

### 『スノーグース』(ポール・ギャリコ著 アンジェラ・バレット画 片岡しのぶ訳 あすなろ書房 2007.9)

0. ヘンリー賞(1941)をもらったポール・ギャリコの代表作の絵本化です。

イギリス南東部の湿地帯の浜辺、使われなくなった灯台にひとりの男が移り住んだ。彼は黒い髪と黒い髭、そして背中にこぶを背負っていた、その様相から人との交流を避けて、海辺の鳥やいきものの絵を描き、北から渡って来る鳥たちに餌をやり安全にまた飛び立ってゆかれるように守ってやっていた。ある年の秋深くひとりのみずぼらしい少女が傷ついた鳥を連れてやってきた。まっしろい、そして翼の先が黒いその鳥はスノーグース。カナダからどう間違えたかこのグレートマーシュにやってきて猟師に撃たれたのだ。男は手当てをしてやり鳥に<迷子の王女様>と名づける。男の様子に恐ろしさを感じながらも何かを感じる少女。男と鳥と少女。いつも<迷子の追い徐様>が渡ってくる間だけの男と少女の交流。何年かたって、少女は大人になり、世界は戦争に。鳥がやってきたある日、灯台を訪ねた少女は、男がヨットを海に浮かべ、対岸のフランスで負傷して行き場のなくなった兵士たちを助けに漕ぎ出すのを見送る。ヨットの上を守るように巡回しながらついていくスノーグース……。

とても美しく叙情的ですが、はじめ、何故60年前のものを絵本(絵本原書も2007)にと思いましたが、背後に自然保護や、平和の願いがこめられていて(さすが反骨精神旺盛のギャリコ)、まあ意味あるかなと思直したところです。でも子ども向けというより、若者、特に若い女性ねらいかな?(ギャリコの本は『ハイラムホリデーの冒険上下』が入庫しています。痛快な話です)

### 『川の光』(松浦寿輝著 中央公論新社 2007.7)

小動物が主人公の話は児童文学にはたくさんあります。

『たのしい川辺』(グレアム著)、『冒険者たちシリーズ』(齊藤惇夫著)……。

しかし、これは、児童文学と銘打っていません。読売新聞に連載されたものだそうです。連載中から反響が大きかったとか。

川のほとりに住むネズミのタータとッチとおとうさんの3人家族が川を道路にする人間の手を逃れ、住み慣れた川辺を離れ、ふたたび大好きな川の流れのほとりに住まいをみつけるまでの苦難と冒険の旅のはなしです。

著者は大学教授(表象文化論)、詩人、芥川賞作家。

たしかに子どもに語りかけてはいないけど、著者のあとがきにもあるように、楽しんでこの物語を書いたことが心地よく伝わってきます。子どもなら、小学高学年以上が楽しみ、私たち人間社会を振り返るでしょう。大人の人に読んでいただきたい。やさしい作家の心が伝わってきます。作家の目線で楽しんでください。

私は、川が好きで、すぐ手にとりましたが、実は、ネズミは苦手です。この本を読みながら、彼らをいとおしいと思いつつ、現実のねずみを思い出し、気もそぞろというか落ち着かない気分だったのですが、途中から物語にはまりました。(空・花・颯)

上記2冊のほか、こんな本も入りました。

## 新入庫案内

### 子どもの本

『空がレースにみえるとき』(エリノア・L・ホロヴィッツ文 バーバラ・クーニー絵 ほるぷ出版 1976)

都会の子どもたちは余程想像力をたくましくしないとこの世界を感じられないかも知れませんが、季節の移ろいを敏感に感じられるこの地の子どもたちには、すばらしい世界の扉が待っています。35刷です。(絵本)

『ねむれないの、ほんとだよ』(ガブリエラ・ケセルマン文 ノエミ・ビリヤムーサ絵 角野栄子訳 岩波書店 2007.9) 子どもも、親もこんなことを繰り返しながら大きくなります。(絵本)

『終わらない夜』(セーラ・M・トムソン文 ロブ・ゴンサルヴェス絵 ほるぷ出版 2005)

静謐な魂とふれあう夜。子ども時代の大切な時。(絵本)

『三つ子のこぶた』(中川梨枝子作 山脇百合子絵のら書房 1986)

子どもとお母さんのおはなし、とあります。ひとりで読めるようになったお友だちにもおすすめです。32刷。

『がんばれヘンリーくん』(ベバリー・クリアー作 松岡享子訳 学研 改訂新版 2007.6)

40年以上読み継がれてきたおはなしの改訂版。小学校中学年の男の子に。背景はちょっと古いですが。

『オオカミに冬なし』(リュートゲン作 中野重治訳 岩波書店 1964)

100年くらい前のおはなしです。自然の厳しさは今でもかわりません、高学年の人へ。これもずっと読まれ続けています。

『曲芸師ハリドン』(ヤコブ・ヴェゲリウス作 菱木晃子訳 あすなろ書房 2007.8)

子どもより大人の心に問いかけ暖かくしてくれるお話。

『語られると怖い話(ホラーセレクション2)』(赤木かん子編 ポプラ社 2006) 怖いおはなしを憶えてみたい人へ。

『赤鬼エティン(愛蔵版おはなしのろうそく6)』(東京子ども図書館 2007.8)

『おはなしのろうそく 26』(東京子ども図書館 2007.9) ※おはなしのろうそく、愛蔵版は販売できません。

### おとなの本

『博士の本棚』(小川洋子著 新潮社 2007.7)

『海に帰る日』(ジョン・バンヴィル著 村松潔訳 新潮社 2007.8) 2005年ブッカー賞受賞作。

『林檎の木の下で』(アリス・マンロー著 小竹由美子訳 2007.3) 2005世界でもっとも影響力のある人100人

『米原万里の「愛の法則」』(米原万里著 集英社 2007.8) 急逝した彼女の小気味よい意見をお聴きあれ。

『文車日記』(田辺聖子著 新潮文庫 1974 51刷)

『からくり からくさ』(梨木香歩著 新潮文庫 2002)